

## 日本における『禅源諸詮集都序』の受容と出版

會 谷 佳 光

### 一 はじめに

『禅源諸詮集都序』は、華嚴第五祖の唐・釈宗密（七八〇～八四一）がみずから編輯した『禅源諸詮集』に附した序文であり、教禅一致を主張した著作として知られている。『禅源諸詮集』は、互いに誹謗しあう当時の禅宗各派の状況を憂い、諸家の主張のなかで禅門の根源の道理を言いあてた文字・句偈を書き留めて一蔵となして、後代に残そうとしたものである。しかしながら本文は宋代には早くも散佚していたようであり、現在これを引用した文献すら見出せないことから、一説には『禅源諸詮集』は実際には編纂されなかったともいわれる<sup>注1</sup>。そもそも宗密の説いた教禅一致思想は、宋代に永明延寿（九〇四～九七五）によって継承されたが、その後は継承者もなく、中国仏教に大きな影響を与えることがなかった<sup>注2</sup>。ところが『都序』の出版についてみると、宋代に少なくとも宋と遼で一度ずつ開板されたと見られ、宋版は日本・朝鮮に伝わり、遼版は元版が校刊される際に、その底本のひとつになった。元代以後、宗密の思想はそれほどふるわなかったが、決して関心が失われたわけではなく、元代には『都序』が校刊されているし、明代にはこの元版が底本となって大蔵経に入蔵され、明・釈祿宏や清・釈道霽による校訂本も刊行された。また朝鮮は宗密の思想の影響が非常に濃厚なところであり、成宗の頃から宋版の覆刻本が盛んに開板された。この中国・朝鮮における『都序』の流伝・出版の状況に対し、日本にも早くから『都

序』が伝わり、和刻本が数版出版されている。そこで本稿では、『禅源諸詮集都序』が、いつ頃どのようにして日本に伝わり、どのような人々によって受容され、和刻本が出版されていたかを考察することにした。

## 二 日本への伝入

日本側の文献に、いつ頃『都序』の名が初めて現れたのか、正確なところはわからない。ただ次に挙げる数点から考えて、鎌倉時代にはすでに伝わっていたことは間違いない。このことは、次の六点から確認できる。

- ① 明恵高弁（一一七三～一二三二）を開山とする梅尾高山寺に南宋刊卷子本二帖が所蔵されている。
- ② 円照（一二二一～一二七七）が『都序』二巻を手ずから鈔写し、昼夜研覈した<sup>注3</sup>。
- ③ 無住道暁（一二二六～一三二二）が弘安六年（一二八三）に著わした仏教説話集『沙石集』巻四に『都序』が一例引用されている<sup>注4</sup>。

- ④ 智照（一二五四？）が応長二年（一二二二）に鎌倉松谷寺で著わした『心要洞玄記』のなかに『都序』が三例引用されている<sup>注5</sup>。

- ⑤ 湛睿（一二七一～一三四六）が延慶年間（一二三〇八～一三一二）かそれに近い時期に鎌倉極楽寺で著わしたと見られる『心要纂釈』に『都序』が五例引用されている<sup>注6</sup>。

- ⑥ 嘉元三年（一二三五）、南蘭（未詳）なる僧が松谷の慧律師（未詳）の命を受けて『都序』に識語を書いている。

この六点について、それぞれの人物がいつ頃どのようなルートで『都序』に接触する機会を持ちえたか、その宗派・師承関係・住寺等から迫ってみたい。

- ①はおそらく『都序』の初伝であろう。高山寺は、もと高雄神護寺の別院であり、高野山と関係があったことから、そこ

からもたらされた聖教類が多くあったが、高弁がこの寺を興し、華嚴宗と眞言宗にもとづき修行・研學に精勵してから、寺勢が興隆した<sup>注7</sup>。『都序』の南宋刊本がいつ頃高山寺に收藏されたのか、はつきりしたことはわからない。常盤大定氏によれば、高弁は高山寺を開くに当たり、公家の檀施によって、杭州から大藏經二部（福州東禪寺版・湖州版）を将来すると同時に、当時杭州で続々と開板された大藏經外の仏典も、ことごとく輸入したらしく<sup>注8</sup>、そのひとつとして、常盤氏は『都序』の南宋刊本を挙げている。つまり常盤氏は、高弁の時代にこの南宋刊本が高山寺に收藏されたとみなしているようである。このテキストは未見ではあるが、先行研究の調査結果を総合すると、上下二巻で、首には裴休の序文があり、巻上の第十一丈から第十六丈と、巻下の五丈以下を欠き、刊記も見当たらないとのことである。石井修道氏の調査によれば、その裴休の序文と本文は、南宋のとき銭塘の嚴楷が刊行したテキストの朝鮮覆刻本とほぼ一致するとのことであるから<sup>注9</sup>、高山寺藏南宋刊『都序』も嚴楷刊本である可能性が高そうである。よって『都序』の場合も他の高山寺藏の宋版と同じく、高弁の時代に、杭州で開板されたテキストを入手したと見てよいかもしれない。

②の円照は、東大寺戒壇院で律の復興に尽力したことで知られるが、臨濟宗東福寺の開祖、聖一国師円爾弁円（一二〇二～一二八〇）のもと、かつて参禅したことがあり、教律禅一如を主張した人物である。弁円はというと、嘉禎元年（一二三三）に入宋し、径山の無準師範（一一七八～一二四九）の法嗣となり、仁治二年（一二四一）に帰国した人物である。この弁円の法嗣が、③の無住道暁である。古田紹欽は、宗密の著作がおおむね鎌倉時代に高麗を経由してもたらされたものの、『都序』は高麗僧義天の『新編諸宗教藏総録』に著録されないことから、高麗に伝入するより早くに、弁円が直接南宋から持ち帰ったのではないかと推測する<sup>注10</sup>。弁円に学んだ円照・無住がともに『都序』を目にしていたことから考えて、彼らの見た『都序』が弁円によって将来されたものだった可能性は十分ある。その傍証として、大道一以（一二九二～一三七〇）『普門院経論章疏語録儒書等目錄』（東福寺藏）関函に「禅源序二冊」と見える。この目錄は、文和二年（一二三三）、普門院院主大道が、弁円将来本を收藏していた普門院の書庫の調査に際し、弁円の作った『三教典籍目錄』を底本に目錄を書

写し、さらに、これを校訂して作成した普門院の現存書目であるから<sup>注11</sup>、本目著録の『都序』が弁円将来本であった可能性は高い。

④智照は、東大寺戒壇院系華嚴学の泰斗凝然（一二四〇～一三二二）の高弟である。凝然は正元元年（一二五九）東大寺戒壇院にて円照に師事し、以後八宗を兼修し、円照の死後、戒壇院院主となった人物である。よって智照は、律においては、円照の孫弟子に当たる。なお智照は戒壇院系華嚴学だけでなく、高山寺系華嚴学の影響もかなり受けていたといわれている。一方、⑤の湛睿も凝然の高足であり、智照はその法兄ということになり、智照から手沢本を伝領されるなど、両者が密接な関係にあったことが指摘されている<sup>注12</sup>。智照・湛睿の二人は、ともに戒壇院系華嚴学を東国に伝え広めた人物として高く評価されているが、この二人がともに鎌倉で著わした『心要』の注釈書に『都序』を引用していることから考えて、彼らは東国に赴く際、『都序』を携行していたに違いない。また、このとき鎌倉にもたらされたテキストは、おそらく円照親筆本そのものか、これと同系統のテキストであって、戒壇院に伝わっていたものと考えるのが自然であろう。

⑥の嘉元三年の識語は、東京大学総合図書館・駒沢大学図書館所蔵の無刊記本の巻上の末尾に二丁に渡って附刻されるもので、現存する『都序』の和刻本中、最古の序跋である。その内容は、あくまで『都序』を顕彰することに重点があり、出版に関しては記されていないので、もともと『都序』に書き入れてあった識語が、後世になって附刻されたものと思われる。いまその末文のみを挙げると、次のようである。

其全書編載芸文志、列在丙部録、今見所得者、可謂崑山之片玉、豈非江水之濫觴哉。衆諸人須忌象而得意、目擊而道存耳。時嘉元乙巳歲閏十二月上弦受松谷慧律師命南蘭敬誌。

この識語に見える松谷の慧律師、南蘭については未詳であるが、「松谷」とは、おそらく鎌倉松谷寺のことであろう。熊原政男氏によれば、鎌倉松谷寺は、松ヶ枝と呼ばれる佐介谷の入り口に近い西側の谷にあったと推測され、先に触れた智照が、少なくとも嘉元二年（一二三〇）から延慶三年（一二三一〇）にかけて、この松谷寺に住したとのことである<sup>注13</sup>。先述

したように、智照は東大寺所伝の『都序』を携行して鎌倉に至ったと推測されるが、記録上、智照が松谷寺に住したことが確認できる最も早い年である嘉元二年の翌年末に、この識語が書かれたということは、智照による『都序』の伝入を契機に、この識語が書かれたことを暗示している。慧律師・南蘭の伝が一切わからないことから、いま識語の「松谷」が鎌倉松谷寺のことであるとの確証は得られないものの、时期的に見て、同寺の慧律師が智照によって鎌倉にもたらされた『都序』を目にし、おそらくこれが鎌倉初伝だったからであろうが、喜び勇んで南蘭に識語を書かせた可能性は十分ありえよう。以上の点から考えて、嘉元三年識語が書き込まれていたテキストは、弁円将来の東大寺戒壇院系統のテキストだったと見るのが妥当であろう。

ここに、臨済宗の弁円によって将来された『都序』が、円照をはじめとする東大寺戒壇院系華嚴学門徒の間で広まり、円照の法嗣である凝然の門下から出た智照・湛睿によって、十四世紀初頭に鎌倉に伝えられたというひとつの伝播のルートが想定されるのである。『都序』が戒壇院系華嚴学門徒に受け入れられた理由は、いうまでもなく、『都序』が単なる禅宗文献ではなく、中国華嚴宗の五祖でもある宗密が教禅一致を説いた文献であるがために、「八宗兼学」という東大寺の教学と相通じる側面を持っていたことに加え、それを実践した円照・凝然という高僧が続いて輩出したからであろう。

以上のように、『都序』の日本への伝入と受容の状況を、鎌倉時代の文献上に確認される『都序』関連の記事や、それにかかわった人物・師承関係から辿ると、その初伝は高山寺の入手した南宋刊本であろうと認められる。しかしながら、この南宋刊本系統のテキストが鈔写・開板等を経て広まった形跡は、いまのところ見つからない。これに対し、日本で最も流布するに至ったのは、臨済宗の入宋僧によって将来されたテキストである。『都序』は、おそらく鎌倉時代に臨済宗の入宋僧円爾弁円によって将来され、禅僧の間で広まると同時に、これが東大寺戒壇院を中心とした華嚴学僧の間で、華嚴五祖宗密の著作としてもはやされ、伝鈔されていったと思われる。

なお納富常天氏は、日本における華嚴第四祖澄観の『心要』の流行原因について、「日宋交通を因由とした彼我禅僧によ

る宋朝禅の流入、さらにはそれに基づく鎌倉を中心とした仏教諸宗における禅の受容を無視することはできない」と述べるが、五祖宗密の著『都序』の日本への伝入と受容は、奇しくもこれと非常に似通った経過を辿ったのであろう<sup>注14</sup>。

### 三 和刻本の出版

#### 1 五山版

現存最古のテキストは、南北朝時代の延文三年（一三五八）に、臨済宗の春屋妙葩（一三一〇―一三八八）が京都天龍寺雲居庵で刊行した五山版である。

妙葩は、叔父に当たる夢窓疎石のもとに出家して随持した後、建武元年（一三三四）までの八年間、鎌倉浄智寺の住持となった元僧竺仙梵僊の書状侍者として、竺仙の師古林清茂の偈頌や印刷事業などを学んだ。そうして康暦元年（一三七九）には日本最初の僧録司となり、五山を管掌し、渡来の刻工を使って、五山版開板事業として大量かつ長期間に渡る活動をした人物である<sup>注15</sup>。五山版『都序』巻下末丁表の刊語には、次のようにある。

保寿尼寺檀越菩薩戒尼大友惣持、施財命工刊行此版、伏願人人肅清慧目、个个開悟靈心、恩有報資、怨親融接。延文戊戌春雲居比丘妙葩題。

つまり五山版『都序』は、妙葩が保寿尼寺の檀越、大友某の施財によって刊行したものである。当時、天龍寺は、木記に見える「雲居」、すなわち雲居庵と、多宝院・龜頂塔・靈庇廟を残し全焼してしまい、妙葩が幹事となって、その復興につとめていた時期である。この刊語には、どのようなテキストを底本としたかについては一切触れられていない。しかしながら当時の臨済宗は中国との交流が非常に盛んで、実際、妙葩とその師承筋には渡来僧や入宋・入元僧が大勢いる点から考えて、このような人々を通じて伝入されたのではなからうか。

例えば、妙葩が書状侍者として仕えた竺仙自身渡来僧であるし、彼とともに渡来した明極楚俊がいる。また妙葩の師夢窓疎石は、無隠円範・高峰顕日・一山一寧等に師事したが、このうち一寧は正安元年（一二九九）に元の成宗の国書を携えて渡来した臨済宗の僧、また円範の師蘭溪道隆は寛元四年（一二四六）に渡来した臨済宗の僧であり、円範自身、道隆に参禅のち入元している。加えて顕日の師、兀庵普寧・無学祖元は、それぞれ文応元年（一二六〇）、弘安二年（一二七九）に渡来した臨済宗の僧であり、普寧・祖元の師こそ、先述の円爾弁円が入宋時代に師事した無準師範なのである。よって、こういった師承筋から『都序』を入手するのは比較的容易だったと推測される。

五山版の底本については、時期的に見て、宋代に大陸に伝わっていたテキストには違いなからうが、先行研究によって、高山寺蔵の南宋刊本や朝鮮の覆宋刊本とは裴休の序文・本文・「浄染十重図」に異同が見られることから、これらとは別系統のものであることが明らかにされている<sup>注16</sup>。一方、五山版が開板された当時、中国では大徳七年（一二三〇）刊本が行われてから、すでに五十五年の歳月が経過していたが、明代にはこのテキストを底本として『都序』が大蔵經に入蔵されていることから、条件的には、入元僧や渡来僧を介して、大徳七年刊本を入手することが十分可能だったはずである<sup>注17</sup>。

大徳七年刊本は現在伝わらないが、その巻首に冠されていたはずの釈惟大・鄧文原・賈汝舟の三序が五山版にはなく、また大徳七年刊本を底本とした明代の大蔵經系統のテキストと比較すると、序・本文・「図」に多くの異同が見られることから、五山版の底本は大徳七年刊本とは別系統のものであろう。田中良昭氏は、敦煌卷子本と、五山版の覆刻本のひとつを校勘した結果、敦煌卷子本（五代後周太祖広順二年（九五二）書写、台湾国家図書館蔵）が五山版の底本だったのではないかと推測する<sup>注18</sup>。南宋刊本・朝鮮覆宋刊本は、裴休が大中十一年（八五七）にみずから鈔写したテキストに由来し、五代末期に中国南方で流行したものである。五山版がこの裴休親筆本系統のテキストと一致せず、ほぼ同時期に鈔写された敦煌卷子本と一致するということは、敦煌卷子本が裴休親筆本とは別系統のテキストだったことを意味する。裴休親筆本は大中十一年写であるから、敦煌卷子本との枝別れが生じたのは宗密が示寂して十六年後のこととみなされる。つまり敦煌卷子本は宗密

のオリジナルにより近いテキストだった可能性があり、その系統を引く五山版は、『都序』本来の姿を知る上で、大変貴重なテキストといえよう。

なお五山版には三井文庫旧蔵本と大英図書館蔵本の二点があり、ともに、かつて川瀬一馬によって調査がなされたが、このうち三井文庫旧蔵本は所在不明である<sup>注19</sup>。三井文庫旧蔵書の一部は、現在カリフォルニア大学バークレー校東亜図書館に帰したとのことであり、『都序』もここに所蔵されている可能性がある<sup>注20</sup>。

## 2 覆五山版四種

『都序』の諸本のうち、現在最も頻繁に目にするのが、五山版の覆刻本である。

五山版に覆刻本があることは、すでに黒田亮・川瀬によって指摘されていた<sup>注21</sup>。石井修道氏は、それら先行研究の成果と五山版のマイクロとを比較した上で、田原仁左衛門刊本こそ、その覆刻本であると特定し、さらに、田原本と「同じ形態のもの」として、駒沢大学図書館所蔵の平野屋佐兵衛刊本と、二種類の無刊記本を挙げ、無刊記本のひとつには先述の嘉元三年識語があることに言及する<sup>注22</sup>。

調べてみると、覆五山版には、田原本、平野屋本、嘉元三年識語を持つ無刊記本、識語のない無刊記本の四種類が伝わる。

そこで、駒沢大学所蔵の四本に加え、東京大学総合図書館所蔵の「寛永中刊本」、松ヶ岡文庫所蔵の平野屋本、国立国会図書館所蔵の田原本、家蔵の田原本・平野屋本・識語のない無刊記本の計十点に対して書誌調査を行った<sup>注23</sup>。

石井氏は、田原仁左衛門が寛永十九年に五山版『夾註輔教篇』を覆刻したと川瀬が指摘するのによって、『禅源諸詮集』の覆刻も寛永十九年頃であろうと推測する。しかし、石井氏は言及されていないが、駒沢大学所蔵の、嘉元三年識語を持つ無刊記本の奥付部分には、「山城之国相楽之郡木津之庄松原乞食／時寛永十九年三月九日」との識語が書き込まれていることから、この無刊記本は寛永十九年以前の刷りに違いない。東京大学総合図書館蔵「寛永中刊本」を調べたところ、駒沢大



学蔵本と同じく、嘉元三年識語を持つ無刊記本であった。これには書き入れによる識語の類はなかったが、「寛永中刊本」と判定した根拠は、おそらく五山版の禅宗文献の覆刻が寛永年間に盛んに行われたとする川瀬の説によるものである。ともかく、この無刊記本は、寛永年間の、それも十九年以前に開板されたと見てよさそうである。

さて、この無刊記本と、もうひとつの無刊記本・田原本・平野屋本の関係であるが、夙に宇井伯寿が言及している。宇井は田原本について解説する中で、これと「同一の刊本と見られるものの中には刊行者の名の無いものも見出されるから、少なくとも同一版木が二回以上刷られて、一度は刊行者を記さないことがあったのであろう」と述べている<sup>注24</sup>。宇井が嘉元三年識語を持つ版を見たことがあったかどうかはわからないが、現物を調査したところ、覆五山版四種は、版式・字様・版面の傷などからみて、みな同版とみて間違いない。版面の傷についていうと、嘉元三年の識語を持つ無刊記本がもつとも傷が少なく、その傷は無刊記本・田原本・平野屋本にも存在した。次に傷の少ないのは、識語のない無刊記本であった<sup>注25</sup>。また、平野屋本にあって田原本にない傷や、田原本にあるものの、平野屋本のほうが傷が大きい場合も数力所確認できたので、田原本のほうが平野屋本より早い時期に刷られたと見て間違いない<sup>注26</sup>。最も遅くに刷印した平野屋に版木が移行した時期は、駒沢大学蔵の平野屋本に「元禄七霜月良日／濃陽吉祥南陽叟」の識語があることから、元禄七年（一六九四）をその上限と見るべきである。要するに、嘉元三年の識語を持つ無刊記本が寛永年間、それも十九年以前に開板され、寛永十九年以降、嘉元三年識語のない状態で刷られ、さらに版木が田原仁左衛門の手に渡って刷られ、遅くとも元禄七年には平野屋佐兵衛の手に渡って刷られるに至ったのである。

なお田原仁左衛門は寛永元禄間（一六二四～一七〇四）に、平野屋佐兵衛は天和正徳間（一六八一～一七一六）に、ともに京都二条通りに店をかまえた書肆である<sup>注27</sup>。田原本の刊記は、巻下三十丁裏の末行に「二条鶴屋町田原仁左衛門刊行」とあるが、これは一見して埋め木とわかる。版の刷りの順からいっても、覆刻を行ったのは嘉元三年の識語を持つ無刊記本を開板した人物であって、それは田原仁左衛門ではないだろう。よって今までこれを田原本と呼び習わしていたのは今後改

める必要がある。また平野屋本の刊記は卷下三十丁表の末行に「平野屋佐兵衛開板」とある。ぱつと見ただけではわからないが、刷りの順序から考えて、これも埋木であろう。

次に、覆五山版のテキストの問題について考察する。

石井氏は、田原本、つまり覆五山版には訓点や異本の校合（傍注）が存することから、五山版を「かぶせ彫り」したものではないとする<sup>注28</sup>。五山版の書影と覆刻本を見比べると、五山版の版式、左右双边、有界、単魚尾白口が、覆刻本では双边、無界、双魚尾小黒口となっており、石井氏のいう通り、決してそっくりそのまま覆刻されたものではない。しかしながら、両本の字様は大変よく似ている上に、字詰も同じであることから、五山版にこれらの訓点や傍注が書き込まれたテキストか、五山版と同系統のテキストに書き込まれた訓点（送返縦点）や傍注（校異）を五山版に移植して、字詰・字様はそのままに覆刻されたものと思われる。それでは、この訓点と傍注はいかなる来歴を持つものであるのか、また、これらが書き込まれたテキストとは一体いかなるテキストだったのであろうか。

ヒントは、最も早印の無刊記本に附刻された嘉元三年南蘭識語の存在である。この識語が覆刻本の来歴と密接な関係を有することは容易に想像されるところであろう。前節で、南蘭と慧律師の見た『都序』は、嘉元二年頃、東大寺戒壇院系華嚴学を鎌倉に伝えた智照によつて将来されたものであり、それは戒壇院で伝鈔されてきたテキストであろうと推測した。これにやや遅れて、智照の弟子、湛睿も鎌倉に『都序』を携行したと見られる。そう考えた根拠は、智照・湛睿が鎌倉にやつてきて以後にそれぞれ著わした『心要』注釈書に、『都序』が引用されていた点にあった。つまり戒壇院系華嚴門徒の間に伝鈔されたテキストと覆五山版との間には密接な関係があったと想像されるのである。

次に挙げる【智照・湛睿『心要』注釈書所引本・覆五山版対照表】は、戒壇院伝鈔本と五山版との関係を検証するために、智照・湛睿の『心要』注釈書所引の『都序』と覆五山版とを比較対照したものである。ただし検証に入る前に、智照・湛睿『心要』注釈書のテキストの問題について確認しておく必要がある。

## 【智照・湛睿『心要』注釈書所引本・覆五山版対照表】

凡例

- 一、智照『心要洞玄記』・湛睿『心要纂釈』ともに納富常天氏の翻刻（前掲）による。  
 一、対照表中の丸数字は『洞玄記』・『纂釈』それぞれの引用順序を示したものであり、これを『都序』本文の順序に並べ替えてある。  
 一、「〈 〉」は双行注を示す。

覆五山版	智照『心要洞玄記』所引『都序』
<p>・遂依此二空之智修唯識觀及六度四攝等行漸漸伏斷煩惱所知二障証二空所顯真如十地円満轉八識成四智菩提也真如隨成法性身大涅槃也解深密等數十本經瑜伽唯識數百卷論所說之理不出此也此上三類都為第一密意依性說相教然唯第三將識破境與禪門息妄修心宗而相符合</p> <p>・無智亦無得無業無報無修無証生死涅槃平等如幻但以不住一切無執無著而為道行諸部般若千余卷經及中百門等三論及廣百論等皆說此也（智度論百卷亦說此理論主通達不執故該收大小乘法相潛同後真性宗也）此教與禪門泯絕無寄宗全同</p> <p>・如是開示靈知之心即是真性與仏無異</p>	<p>②有証有知者准禪源序此當法相教及北宗禪之見也即禪源出說相教云 依此二空之智修唯識觀及六度四攝等行漸漸伏斷煩惱所知二障証二空所顯真如十地円満轉八識成四智菩提真如隨成法性身大涅槃解深密等數十本經瑜伽唯識數百卷論所說之理不出此也乃至將識破境與禪門息妄修心宗而相符合云云</p> <p>③無照無悟者准禪源詮此亦當三論宗及牛頭洪州之見禪源亦出破相教云 無智亦無得無業無報無修無証乃至諸部般若千余卷經及中百門等三論及廣百論等皆說此也此教與禪門泯絕無寄宗全同云云</p> <p>①禪源詮云 靈知之心即是真性云々</p>

覆五山版	湛睿『心要纂釈』所引『都序』
<p>・今性相二宗互相非者良由不識真心每聞心字將謂只是八識不知八識但是真心隨緣之義故馬鳴菩薩以一心為法以真如生滅二門為義</p> <p>・汎言心者略有四種梵語各別翻訳亦殊一統利陀耶此云肉団心此是身中五藏心也（黃庭經五藏論皆說此心）二緣慮心此是八識俱能緣慮自分境故（色是眼自分境乃至根身種子器世界是賴耶之境各緣一分故云自分境也）此八各有心所於中或唯無記或通善染縁論之中目為心所摠名心也謂善心惡心等三質多耶此云集起心唯第八識積集種子生起現行故（黃庭經五藏論目之為神西天外道計之為我皆是此識）四乾栗陀耶此云堅実心亦云貞実心此是真心也</p> <p>・問既云性自了了常知何須諸仏開示答此言知者不是証知意說真性不同虚空木石故云知也非如縁境分別之識非如照了達之智直是真如之性自然常知故馬鳴菩薩云真如者自体真実識知花嚴迴向品亦云真如以照明為性</p> <p>・空宗以諸法無性為性性宗以靈明常住不空之体為性</p> <p>・有云頓悟頓修者此說上上根性（根勝故悟）樂欲（欲勝故修）俱勝一聞千悟得大摠持一念不生前後際斷（斷障如斬一綫絲万条頓斷修德如染一綫絲万条頓色荷沍云見無念体不逐物生又云一念与本性相応八万波羅蜜門一時斉用）此人三業唯独自明了余人所不見（金剛三昧經云空心不動具六波羅蜜法花云父母所生眼微見三千界）且就事跡而言之如牛頭融大師之類也此二門有二意若因悟而修是解悟因修而悟是証悟</p>	<p>①今性相二宗互相非者良由不識真心每聞心字將謂只是八識不知八識但是真心上隨緣之義故馬鳴菩薩以一心為法以真如生滅二門為義</p> <p>④汎言心者略有四種梵語各別也翻訳亦殊一統利陀耶此云肉団心此是身中五藏二縁慮心此是八識俱能緣慮自分境故三質多耶此云集起心唯第八識也積集種子生起現行故四乾栗陀耶此云堅実心亦云貞実心此是真心也</p> <p>③問既云性自了了常知何須諸仏開示答此言知者不是証知意說真性不同虚空木石故云知也非如縁境分別之識非如照了達之智直是真如之性自然常知故馬鳴菩薩云真如者自体真実識知花嚴迴向品亦云真如以照明為性</p> <p>②空宗以諸法無性為性性宗以靈明常住不空之体為性</p> <p>⑤有云頓悟頓修者此說上上智根性（根勝故悟）樂欲（欲勝故修）俱勝一聞千悟得大摠持一念不生前後際斷（斷障如斬一綫絲万修頓斷修德如染一綫絲万条頓色荷沍云見無念体不逐物生又一念与本性相応八万波羅蜜門一時斉用也）此人三業唯独自明了余人所不見（金剛三昧經云空心不動具波羅蜜法花說父母所生眼耳微見三千界等也）且就事跡而言之如牛頭融大師之類也此門有二意若因悟而修即是解悟若因修而悟即是証悟（文）</p>

『洞玄記』は、現在尊経閣文庫に鈔本一部が所蔵されるのみである。納富氏によれば、智照の自筆でこそないものの、智照が何者かに依頼して書写させたものであり、その後、智照から湛睿に伝領され、智照・湛睿の自筆書き入れがあるという由緒正しいテキストであり、納富氏はこれに基づいて翻刻したとのことである。そのため、『洞玄記』所引『都序』を『都

『都序』の諸本と比較すると、誤脱はほとんどなく、②に「也」字の脱落が見られるくらいである。これに対し、『纂釈』は、納富氏によれば、交尊なる僧が康永元年（一三四一）に東大寺戒壇院新方丈西面寮で書写したものに基づいたため、「テキストが善本でなかったか、もしくは筆者の不注意によるものか、誤字・脱字が随所に見られる」という。確かに、『纂釈』所引『都序』を『都序』の諸本と比較すると、④諸本が「五蔵心也」に作るどころ、『纂釈』だけ「心也」二字を脱し、②「空宗」「性宗」の「宗」を諸本みな「宗」に作るのに、『纂釈』だけ「字」に作り、⑤「万条」の「条」を諸本みな「条」に作るのに、『纂釈』だけ「修」に作る等、数えあげればきりがない。これは湛睿の見たテキストの問題というよりは、納富氏のいう通り、『纂釈』の伝鈔過程で生じたものであるから、湛睿の見た『都序』のテキストを考える上で、参考とはしがたい。重要なのは、これら誤脱を除いたテキストの異同であり、それによつて『纂釈』所引『都序』と、『都序』諸本との親近を見極めることが可能なはずである。

次の表は、『洞玄記』・『纂釈』所引『都序』と、『都序』諸本との異同を示したものである。この表を見ればわかるように、『洞玄記』所引『都序』は五山版・覆五山版と完全に一致しており、智照が見たのは五山版と同系統のテキストだった可能性が高い。これに対し、『纂釈』は③を見る限り五山版・覆五山版と完全に一致するが、①⑤には『纂釈』を含めた他のテキストと比べ、五山版・覆五山版だけ異なる部分が数多く存在する。要するに、『洞玄記』・『纂釈』所引『都序』は、五山版・覆五山版とだけ共通する部分を数多く持つものの、『都序』のテキストとしては全く異質の部分も有することになる。この状況は、『洞玄記』・『纂釈』所引『都序』と、五山版・覆五山版とが共通の祖本を持ちながら、流伝の過程で枝分かれしていったテキストであることを暗示している。

日本における『禪源諸詮集都序』の受容と出版

【智照・湛睿『心要』注釈書所引本・『都序』諸本異同対照表】

凡例

一、「南宋刊本系統」は、南宋刊本未見のため、石井修道・小川隆「『禪源諸詮集都序』の訳注研究」の校記によった。南宋刊本に欠いている箇所『纂釈』①④⑤は、南宋刊本の重刊本のひとつである弘治六年朝鮮刊本によった。

一、「明藏本系統」は、永樂北藏本と嘉興藏本によった。

		『心要洞玄記』	五山版	覆五山版	南宋刊本系統	明藏本系統
1	②	破境	破境	破境	破境	破境教
2	②	相符会	相符会	相符会	相符会	相扶会
3	③	三論及広百論	三論及広百論	三論及広百論	三論広百	三論広百論
4	①	即是真性	即是真性	即是真性	即真性	即是真性

		『心要纂釈』	五山版	覆五山版	南宋刊本系統	明藏本系統
1	①	真心上	真心	真心	真心上	真心上
2	①	馬鳴菩薩	馬鳴	馬鳴	馬鳴菩薩	馬鳴菩薩
3	③	問上既云	問既云	問既云	問上既云	問上既云
4	③	真如之性	真如之性	真如之性	真如之性	一真如之性
5	③	以照明為性	以照明為性	以照明為性	照明為性	照明為性
6	⑤	八万波羅蜜門	八万波羅蜜門	八万波羅蜜門	八万波羅蜜行	便具河沙功德八万四千波羅蜜門
7	⑤	所不見	所不見	所不見	所不及	所不見
8	⑤	法花説	法華云	法花云	法華説	法華亦説
9	⑤	眼耳	眼	眼	眼口	眼耳
10	⑤	三千界等也	三千界	三千界	三千界等也	三千界等也
11	⑤	此門	此門	此二門	此門	此門
12	⑤	即是解悟	是解悟	是解悟	即是解悟	即是解悟
13	⑤	若因修而悟	因修而悟	因修而悟	若因修而悟	若因修而悟
14	⑤	即是証悟	是証悟	是証悟	即是証悟	即是証悟

前節で推測したように、智照・湛睿が見た『都序』は、円爾弁円将来本が伝鈔されて東大寺戒壇院に伝わったテキストだったと考えられるのに対し、五山版の方は臨済宗妙葩によって刊行されたものであり、その底本は妙葩の師承にあまた存在する入宋僧・入元僧・渡来僧によって将来されたものと考えられる。そして先述のように、妙葩の師承を遡れば、入宋して無準師範の法嗣となった弁円に行き着くのである。つまり戒壇院系伝鈔本と五山版は、弁円将来本という共通の祖本から枝分かれたものだった可能性があるのである<sup>注29</sup>。そう仮定した場合、両本に異同が生じた原因は、ひとつには、臨済宗・華嚴宗という異なる環境で伝鈔されたテキストだったからであり、もうひとつには『洞玄記』・『纂釈』が十四世紀初頭のテキストを反映するのに対し、五山版は十四世紀半ばのテキストを反映するからであろう。伝鈔に費やした約五十年の歳月の差が、五山版により多くの誤脱を発生させたとしても不思議ではあるまい。『洞玄記』・『纂釈』所引『都序』と、五山版・覆五山版の異同状況は、この弁円将来本の系譜をまさしく反映させたものとはいえないだろうか。

以上の点から、五山版の底本は、弁円将来本系統のうち臨済宗内で伝鈔されてきたテキストだったと推測してみたい。しかしながら、五山版の覆刻に当たって、この臨済宗伝鈔本系統のテキストに、東大寺戒壇院に連なるとおぼしき南蘭の識語が附されたのは、一体なぜであろうか。これは単純に考えれば、覆刻に携わった人物が戒壇院と密接な関係を有していたことを示すものであろう。つまり戒壇院に繋がりのある人物が五山版『都序』の覆刻を計画し、自派の識語を付け加えたと推測されるのである。

さらに想像をたくましくすれば、覆五山版に附された訓点や傍注も、戒壇院で『都序』の受容以来伝承されてきたものが取り込まれたと考えることもできる。もしそうだとすると、五山版の妙葩の刊記を残しておく、覆五山版を見た人は、この訓点・傍注を臨済宗伝承の訓点・傍注であると誤解しかねない。そのため妙葩の刊記を削除して、自派の識語を附刻するに至ったのではなかろうか。

いま、その傍証として注目されるのが、覆五山版に傍注の形で附刻される校異が朝鮮覆宋刊本と一致するという宇井の対

校結果と、高山寺藏南宋刊本と朝鮮覆宋刊本の本文がほぼ一致するという石井氏の対校結果である。そこで、覆五山版の校異全三十例について、高山寺藏本・朝鮮本、それに明藏本の本文と比較してみた<sup>注30</sup>。その結果、校異が、高山寺藏本・朝鮮本と一致して明藏本と一致しないケースが五例、朝鮮本と一致して高山寺藏本・明藏本と一致しないケースが一例、三本のいずれとも一致するケースが十五例、いずれとも一致しないケースが一例あった。また高山寺藏本が欠丁のために、朝鮮本・明藏本とだけ比較した部分についてみると、朝鮮本と一致して明藏本と一致しないケースが三例、いずれとも一致するケースが五例あった。三本のいずれとも一致するケース（宋版欠丁のケースを含む）が多いのは、この三本がともに裴休親筆本系統のテキストだからであり、そのなかに高山寺藏本・朝鮮本が一致して明藏本が一致しないケースが含まれるのは、明藏本の底本が元大徳七年に校定されたテキストだからである。よって、校異中に、高山寺藏本・朝鮮本と一致して明藏本と一致しないケースが存するのは、この校異に用いられたテキストが、裴休親筆本系統のテキストのうち、大徳七年に校定される以前のものであり、高山寺藏本・朝鮮本と非常に親しい関係にあったことを意味する。

ところが、この系統のテキストは、現在確認される限り、高山寺藏本しか日本に伝入された形跡が見当たらない。なおかつ、先述のように、高山寺藏本が鈔写・覆刻を経て外部に伝わった形跡も見当たらない。よって覆五山版の校異は高山寺藏本によってなされた可能性があるのである。ここからは全くの臆測だが、前節で述べたように、智照は東大寺戒壇院凝然の高足でありながら、高山寺系華嚴学の影響を強く受け、弘安七年（一二八四）には高山寺に居していたことさえある。この時期に、智照が高山寺に『都序』の戒壇院伝鈔本を持ち込み、高山寺藏本と校勘して、その結果を戒壇院伝鈔本に書き付けたものが、めぐりめぐって覆五山版に取り込まれたということがあったとしても不思議ではない。先述の鎌倉松谷寺を仲介とした智照と覆五山版の関係から考えて、この臆測もあながち検討はずれとはいえないのではなからうか。

なお覆五山版に、鎌倉松谷寺の関係者とおぼしき南蘭の識語が附されている点に着目すれば、もしかすると、この覆刻自体、鎌倉で行われた可能性が出てくる。もしそうだとすると、その版本がどういった経緯で京都の田原仁左衛門や平野屋佐

兵衛の手に渡ったのかという新たな疑問が生じてくる。このことについては、江戸時代の和刻本出版に大きな影響をもたらした黄檗版大蔵経の開板印造が絡んでくる。

### 3 黄檗版大蔵経本二種

黄檗版大蔵経は、寛文九年（一六六九）から天和元年（一六八一）にかけて、宇治の黄檗山万福寺宝蔵院で、鉄眼道光によつて募縁・開板された。その底本に嘉興版大蔵経が用いられたことはよく知られているが、刷りの早いものの中には、嘉興蔵本ではなく、和刻本等がかわりに用いられ、後の刷りになって嘉興蔵本の覆刻にすぐ替えられることがあるとのことである。

黄檗蔵中で最も早くに刷られたのは、正明寺所蔵本である。松永知海「後水尾法皇下賜正明寺蔵初刷『黄檗版大蔵経』目錄」によれば、その『都序』は二巻本で、紙数は一巻目が四十一丁（うち序が四丁）、二巻目が三十丁、千字文はないという。未見であるが、この巻数・紙数・千字文の有無は覆五山版と一致する<sup>注31</sup>。これに対し、元禄期の刷りといわれる獅谷法然院所蔵の黄檗蔵所収の『都序』<sup>注32</sup>を調査したところ、果たして覆五山版であった。しかも覆五山版の四種の刷り本のうち、二番目に当たる識語のない無刊記本であり、版面の傷の状態からみて、駒沢大学蔵本よりやや後印で、家蔵本とほぼ同時期に刷られたものであることがわかった。よつて黄檗蔵最初期の刷り本である正明寺蔵本も、識語のない無刊記本であると見てよいであろう。

ところで、黄檗版『都序』には、この覆五山版の他に、嘉興蔵の覆刻本が存在する。家蔵の覆嘉興蔵版には、刊記はないものの、版式から一見して嘉興蔵の覆刻とわかる体裁となっていて、分巻方法も一致する。文政期の刷りである上越教育大学所蔵の黄檗蔵所収の『都序』も、分巻・各巻の丁数が家蔵本と完全に一致するから<sup>注33</sup>、この家蔵本は黄檗蔵の離れ本である<sup>注34</sup>と見てよい。また嘉興蔵の覆刻とはいえ、送仮名・返点・縦点を加えられている点、嘉興蔵の元版三序（先述の积惟大・



鄧文原・賈汝舟の三序のこと）がない点と、嘉興蔵では元版三序から卷上之一の末までが通して丁付けされるのに、黄檗版では、裴休序が一丁から三丁で、卷上之一は再び一丁から始まる点が、嘉興蔵本と異なっている。これは、覆刻に用いた嘉興蔵本に元版三序がなかったためかもしれないし、家蔵の黄檗蔵本だけこれを欠くのもかもしれないが、他の黄檗蔵本を見ていないので、正確なところはわからない。他の三巻の丁づけは嘉興蔵本と全く同じで、しかも字様もよく似ているので、嘉興蔵の覆刻と見て間違いない。

さて、黄檗蔵本『都序』に二種の版があるということは、当初は覆五山版の入れ版によってすまされていたものが、その印造の過程で、覆嘉興蔵本に改刻されたことを意味する。そこで次に、この改刻がいつ頃行われたかを考えてみたい。

覆五山版四種の刷り順は、先述したように、嘉元三年識語のある無刊記本、識語のない無刊記本、田原仁左衛門本、平野屋佐兵衛本であり、最も刷りの遅い平野屋本の刷り年の上限は、その識語から元禄七年とわかる。このうち黄檗蔵に入れ版されたのは、識語のない無刊記本であるが、その後、その版本は元禄七年までの間に、田原・平野屋と二度蔵版者を代えて刷られている。つまり覆五山版は、元禄七年よりもやや早い時期、つまり黄檗蔵印造のかなり早い時期にすでに黄檗蔵からはずされていた可能性が高い。覆五山版がはずされたということは、かわりの版本が黄檗蔵に取り込まれたことを意味する。ここでの「かわりの版本」とは、覆嘉興蔵本のことであると見るべきであろう。そうでなければ、覆五山版の代わりにする意味がない。

また元禄期の刷りである法然院本では依然として覆五山版が入れ版されている。松永氏によれば、黄檗蔵は購入者に対し全蔵を一括納入していたのではなく、数回に分けて分納していたことが『全蔵漸請千字文朱点』という納入台帳によってわかることである<sup>注34</sup>。また、印刷にかかる手間から考えて、注文があるごとに一蔵一蔵刷るわけではないから、黄檗蔵を刷る場合、一度にある程度まとまった部数が刷られていたに違いない。そのため、入れ版が覆嘉興蔵本に改刻される場合、改刻の完成した時点で、入れ版による印造分がまだ残っていることもあったにちがいない、さらには入れ版のまま納入され

ることもあったかもしれない<sup>注35</sup>。また改刻が完成すれば入れ版の版本はただちに不要となるのだから、入れ版によって納入された時期と、その版本が書肆へ移行した時期との間にはタイムラグがあったはずである。つまり法然院本が元禄期の納入だったとしても、その頃には覆嘉興蔵本がすでに完成し、覆五山版の版本が田原の所有に帰し、田原の名義で印造されていたとしても不思議はないのである<sup>注36</sup>。

以上の点から考えて、覆嘉興蔵本の完成は、黄檗蔵の完成した天和元年からそう遠くない時期、遅くとも元禄初期にあったと見られる。

次に、覆五山版の開板から黄檗蔵に入れ版されるまでの経緯について考えてみたい。まず前節で論じた覆五山版前史について、ざっとおさらいしておく、次のようである。弁円将来本は、臨済宗門徒の間で広まる一方、東大寺戒壇院系華嚴学門徒の間に受容された。後者によって伝鈔されたテキストは、十四世紀初頭、鎌倉松谷寺に伝わって識語が書かれ、十四世紀半ばには前者によって伝わったテキストを底本として臨済宗の妙葩によって開板された。そして、寛永年間の十九年以前に、五山版を底本に、鎌倉松谷寺で書かれた識語と、東大寺戒壇院に伝わった訓点・傍注とが附されて覆刻された。その開板地は、覆五山版中に明記されないものの、東国鎌倉か、戒壇院のある奈良か、もしくは黄檗蔵開板の地にして田原仁左衛門等も店を構えていた京都だった可能性もある。とすれば、覆五山版の開板から京都で黄檗蔵に入れ版されるまでの経過としては、

一、戒壇院系華嚴学の門流によって、嘉元三年識語と訓点・傍注が加えられて、奈良か京都で覆刻・印刷された後、黄檗蔵に入れ版された。

二、戒壇院系華嚴学の門流によって、嘉元三年識語と訓点・傍注が加えられて、鎌倉で覆刻・印刷された後、黄檗蔵に入れ版されることになって、京都に版木が移された。

上記の二つのケースが想定されよう。

なお覆五山版の無刊記本から識語が無くなった原因については、版本が譲渡されるまでの間に不可抗力によって失われたか、黄檗蔵に入れ版される過程で、何らかの理由で識語が邪魔となって削られたかのいずれかであろう。黄檗蔵に町版が入れ版される際、邦人序跋がどう扱われたかについては、今後の調査にまきたい。

#### 4 元禄十一年江戸釈喜雲重刊本

和刻本の最後を飾るのは、大正蔵本の校本に用いられた元禄十一年刊本である。ちなみに、この校本とは大谷大学所蔵本のことであるが、これと同版が松ヶ岡文庫にも所蔵され、今回、前者の書影を入手し、後者の書誌調査を行った。上下二巻、無界八行十六字注文小字双行、無魚尾上白口下小黒口、眉注、句送返縦四声点、元版三序がなく、巻下の巻末に釈契玄「後記」、釈道霈（一六一五〜一七〇二）の識語、「助刻芳名開後」と題する康熙三年釈道宗識語があり、末丁の表には次のような釈喜雲（?〜一七一七）の跋がある。

禪詮都序、斯土旧刻、抄襲假冒、字脚多駁。是以覽者往往病諸依違、鼓山霈公考覈諸本、振刷清釐、於焉東猜西疑一旦氷釈。余頃獲者法宝膺弗措、遂欲闡二利之門。就其原本、側点国字、以付剗剗、伝之于不朽。冀便於兄弟它日之宗説、人人会教海、個個徹禪源。元禄戊寅午仲冬初一日東武万年山比丘喜雲拜手識。

これによれば、元禄十一年刊本は、喜雲が道霈校刊本を得て訓点を附して重刊したものであり、現に、題簽・版心上部には「扶桑／重刻」四字が刻されている。その底本たる道霈校刊本は、現在東京大学東洋文化研究所に所蔵される。さらに喜雲の跋の裏には「元禄十一（戊寅）十一月吉日／江府日本橋南一丁目／須原屋茂兵衛梓」の刊記がある。喜雲は、丹崖喜雲のことで、万年山は曹洞宗の江戸三カ寺といわれた芝の青松寺の山号であり、元禄十一年（一六九八）は道霈校刊本が出版された三十四年後に当たる。このテキストの系統、すなわち道霈校刊本の系統については、別稿に譲り、ここでは結論だけ記しておく<sup>注37</sup>。

道需は『都序』の校訂に当たって、雲棲本（釈祿宏（一五三五〜一六一五）が裴休親筆本系統のテキストを底本に用いて刪定したテキスト）・南藏本（永樂南藏第二次続刻本）・楞嚴本（嘉興藏本。南藏本とともに大徳七年刊本系統のテキスト）の三本を用いたとみずから跋中で述べ、さらに祿宏刪定本の非を指摘するが、その実態はというと、祿宏刪定本によることが多い<sup>注38</sup>。それは、道需の跋に「然後知非出大師筆、或大師化後、門人所刻也」とあるように、道需は祿宏刪定本の欠点を祿宏の門人の責任とみなしたために、祿宏刪定本を底本として、その欠点を明藏本二本で補訂したからであると推測される。

当時、すでに覆五山版が普及し、黄檗藏の覆嘉興藏本も完成していたのにもかかわらず、喜雲があえて道需校刊本の重刊に踏み切ったのは、これら当時の普及本に誤りが多いことを憂えていたからばかりでなく（「斯土旧刻、抄襲假冒、字脚多駁」）、これまで『都序』の出版にかかわったのが、臨済宗・華嚴宗・黄檗宗といった他宗ばかりであったなかで、曹洞宗として初めて開板された『都序』のテキストであり、かつ清初の著名な学僧道需によって校勘が加えられたテキストであったことが大きかったものと推測される。

#### 四 おわりに

以上、『都序』の日本への伝入・受容の経過と、和刻本の出版について考察してきた。

『都序』が日本に伝入されはじめたのは、おそらく華嚴宗の明恵高弁を開基とする拇尾高山寺に将来された南宋刊本であろう。その後まもなく、宋朝禅の流入・受容に伴い、おもに臨済宗の入宋僧や渡来僧等によって禅籍として将来され、禅僧の間で禅宗文献として流行したようである。当時、新興著しかつた所謂鎌倉新仏教諸派に対し、旧仏教界が宋朝禅の吸収に躍起となっていた時代にあつて、宗密が華嚴五祖だったことも加わり、その著作である『都序』は、やがて東大寺戒壇院系

華嚴学の学匠の目にとまって華嚴宗の間に広まった。さらに、戒壇院系華嚴学が鎌倉に広まるに伴い、『都序』も東国に伝えられるに至ったようである。この伝入・受容の過程は、そのまま『都序』の和刻本出版にも反映していて、そのため五山版・覆五山版の出版をめぐるのは、京都・奈良・鎌倉の三地や、臨済宗・東大寺戒壇院系華嚴学の両宗が錯綜している。例えば、現存最古の和刻本である五山版は、臨済宗の妙葩によって『都序』初伝の地である京都で開板されたのに対し、その覆刻本の初印本には鎌倉に『都序』の戒壇院系伝鈔本が伝わったことを契機として書かれたと見られる嘉元三年識語があることから、その開板地は鎌倉だった可能性すらある。なおかつ五山版の底本と戒壇院系伝鈔本は、もとを辿れば、ともに円爾弁円将来本から枝分かれしたものであったと見られ、後者に伝承された訓点や傍注が覆五山版に取り入れられた可能性があるのである。書物の編輯地と実際の開板地が異なることになってしまいが、このようなケースは江戸時代の出版においてはまま見られることである。

覆五山版は寛永年間に刊行されるや、少なくとも三回は蔵板者を代えて刷られている。その時期は、短めに考えても、寛永のはじめ（一六二四）から元禄七年（一六九四）までの七十年間のことである。買い手がなければ、せっかく版木を購入しても儲からないから、度重なる蔵板者の交替は、それだけ需要があったことを意味する。その蔵板者のうち二人目は、黄檗版大蔵経印造の最初期にかかわった人物であり、黄檗蔵に覆五山版を入れ版している。ほどなくして、黄檗蔵では嘉興蔵本による覆刻本が完成したために、入れ版されていた覆五山版の版木が不要となり、版木が田原仁左衛門の手に渡り、さらに元禄七年までには平野屋佐兵衛に帰した。その後、平野屋がいつ頃までこの版木を保持・印造していたかはわからない。黄檗蔵の普及具合から考えれば、覆五山版は黄檗蔵の覆嘉興蔵本に取って代わられたことも想定される。その要因は、五山版が宗密のオリジナルに近いがために、本文や「浄染十重図」等に難解な点があったのに反し、大徳七年刊本系統の覆嘉興蔵本では、後人の手が入って、より明解になっていたからかもしれない。

一方、覆五山版と、黄檗蔵の覆嘉興蔵本が併存していたのとはほぼ同じ時期の元禄十一年に、江戸では、曹洞宗の丹崖喜雲

が、康熙三年道需校刊本に触発されて、その重刊本を出版した。覆五山版や覆嘉興藏本がすでに出回っていたにもかかわらず、喜雲が出版に踏み切ったのは、五山版系統のテキストに対する不満はもとより、同じ曹洞宗の学僧道需によって校勘を施されたテキストだったことが大きかったと考えられる。もちろん、この出版が成り立ったのは、当時の『都序』の需要の高さを物語るものでもある。

これまで調査した限りでは、元禄十一年刊本の出版以降、和刻本の出版は確認されていない。このような状況が生じた要因としては、宗密教学の日本における流行状況や黄檗版大藏經の普及といった要因がかかわってくると思われるが、この問題については後日に期したい。

## 注

1 『禅源諸詮集』本文の存否の問題については、拙著『宋代書籍聚散考——『新唐書』芸文志积氏類の研究——』（汲古書院、二〇〇四年八月）「はしがき」等を参照。

2 鎌田茂雄『宗密教学の思想史的研究——中国華嚴思想史の研究 第二——』（東京大学東洋文化研究所、一九七五年三月）二三二～二三七頁・六〇九頁を参照。

3 凝然『円照上人行状』巻上「宗密禅師作禅源諸詮都序二卷、照公翫之、昼夜研覈（自写持之）」。

4 「圭峯ノ宗密禅師モ、禅ハ仏ノ意、教ハ仏ノ言、諸仏ハ心口相応スト云テ、三宗三教ノ和合ノ事、…圭峯ノ禅源諸詮ノ中ニ有之。上巻終也。道人尤コレヲ見給ベシ」とある。

5 納富常天「金沢文庫本『心要洞玄記』について」（『禅研究所紀要』第六・七合併号、一九七六年十二月）を参照。なお用例はこの論文に翻刻された本文によって確認したものである。『心要洞玄記』は華嚴四祖澄観撰『答順宗心要法門』に対する注釈書。以下に述べる湛睿『心要纂釈』も同じ。

6 納富常天「湛睿の『心要纂釈』について」（『駒沢大学仏教学部論集』第十九号、一九八八年十月）を参照。なお用例はこの論文に翻刻された本文によって確認したものである。

7 築島裕『国語の歴史』（東京大学出版会、一九七七年十一月）「第十三章 高山寺経蔵の調査と国語史学——国語史資料の探索と研究——」を参照。

8 『支那仏教の研究第三』（名著出版、一九七四年十一月覆刻、初版一九四三年十一月春秋社松柏館）「宋代に於ける華嚴教学興隆の縁由」を参照。

9 石井修道「大英図書館所蔵の五山版『禪源諸詮集都序』について」（『印度学仏教学研究』四十四卷第二号、一九九六年三月）を参照。なお南宋版楷刊本は、五代末期に、中国南方で流行した裴休親筆本系統のテキストに由来するものである。なお本稿の行論上、数箇所『都序』の本文を校勘したが、やはり石井氏と同じ結果が得られた。

10 「圭峯宗密の研究——法系・行状・著作・弟子等について——」（『支那仏教史学』第二卷第二号、一九三八年五月）を参照。なお古田は、『都序』が弁円によって将来された傍証として、『沙石集』に『都序』の思想の強い影響が見られる点を挙げる。また、先行研究によれば、朝鮮・覆宋刊本と和刻本とは、裴休の序文や『都序』の本文に大きな異同があるとのことであるから、高麗經由ではないという古田の推測には信憑性がある。

11 今枝愛真「『普門院蔵書目録』と『元亨釈書』最古の写本——大道一以の筆蹟をめぐって——」（『田山方南先生華甲記念論文集』田山方南先生華甲記念会、一九六三年十月）を参照。

12 納富氏「金沢文庫本『心要洞玄記』について」（前掲）を参照。

13 「金沢文庫書誌の研究」（『金沢文庫研究紀要』第一号、一九六一年十一月）の「鎌倉松谷寺及び松谷文庫に就て」を参照。

14 納富氏「金沢文庫本『心要洞玄記』について」（前掲）を参照。

15 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（講談社、一九八三年五月）「春屋妙葩」条等を参照。

16 石井修道・小川隆「『禪源諸詮集都序』の訳注研究」(二) (十) (『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五十三至五十七号、同『仏教学部論集』第二十七至三十号、一九九五年三月至一九九三年十月)等を参照。

17 大徳七年刊本については、拙稿「中国における『禪源諸詮集都序』の流传と出版」(『二松学舎大学人文論叢』第七十六輯、二〇〇六年三月)を参照。

18 『敦煌禅宗文献の研究』(大東出版社、一九八三年二月)第五節「『禪源諸詮集都序』」を参照。初出は「敦煌本『禪源諸詮集都序』残巻考」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十七号、一九七九年三月)。

19 三井文庫旧蔵本は、川瀬一馬『五山版の研究』(日本古書籍商協会、一九七〇年三月)六九頁・四〇四頁、大英図書館蔵本は、川瀬一馬・岡崎久司『大英図書館所蔵和漢書総目録』(講談社、一九九六年五月)三四七頁、ケネス・B・ガードナー編『大英図書館蔵日本古版本目録』(大英図書館・天理大学図書館、一九九三年)六二頁・二四九頁を参照。

20 冉雲華「『禪源諸詮集都序』最早印本の発現和証実」(『東方雑誌』復刊第八巻第二期、一九七四年八月)を参照。

21 黒田亮『朝鮮旧書考』(岩波書店、一九八六年第二刷、初版一九四〇年二月)「禪源諸詮集都序に就いて」、川瀬一馬『五山版の研究』「近世初期に於ける五山版の翻刻」を参照。

22 以下、石井氏の覆五山版に関する所説については、「大英図書館所蔵の五山版『禪源諸詮集都序』について」(前掲)を参照。

23 なお覆刻本四種のいずれにも、五山版の刊記は覆刻されていない。

24 『禪源諸詮集都序付禅門師資承襲図』(岩波書店、一九三九年一月)二二一頁を参照。

25 なお識語のない無刊記本の家蔵本と駒沢大学蔵本とを比較すると、巻下二十四丁表裏において版面の傷が前者の方が後者より一カ所ずつ多いのを除き、他の箇所は皆一致する。よって両本は比較的近い時期に刷られたと見てよい。

26 いくつか実例を挙げておく。序二丁裏上辺には、識語のある無刊記本には傷がないが、識語のない無刊記本には傷が一カ所あり、田原本・平野屋本では三カ所に増えている。また巻上十二丁表右辺には無刊記本にはともに傷がないが、田原本では一カ所に、平野屋本では二カ所に、



傷が増えている。

27 井上和雄『慶長以来書賈集覧』（言論社、一九七九年六月。初版大正五年九月彙文堂書店）四八頁・七八頁を参照。

28 川瀬前掲書「近世初期に於ける五山版の翻刻」によれば、寛永年間から起こる五山版の覆刻本では、そのほとんど全てに附訓が施されているという。

29 この他にも、妙葩が身近にいた入元僧・渡来僧を介して無準師範の周辺で行われていたのと同系統のテキストを入手して底本とした可能性もある。しかしながら、当時大陸で大徳七年刊本という優れた校定本が出ていた状況下で、弁円将来本と同一系統のテキストとはいえ、わざわざ大陸から戒壇院伝鈔本に比べ、誤脱の多い状態のテキストを取り寄せる必然性はない。よって五山版の底本は出版当時に大陸から将来されたテキストではなく、弁円将来本が臨済宗内で伝鈔されたテキストだった可能性の方が高いと考える。

30 高山寺蔵本・朝鮮覆宋刊本・明蔵本との比較に際しては、石井修道・小川隆「『禅源諸詮集都序』の訳注研究」（二）（十）（前掲）を参照させていただいた。

31 『仏教大学総合研究所紀要別冊付録』（仏教大学総合研究所、二〇〇四年十二月）二二四頁を参照。

32 『獅谷法然院所蔵麗蔵対校黄檗版大蔵経並新続入蔵経目録』（仏教大学仏教文化研究所、一九八九年十二月）五九三頁を参照。

33 『上越教育大学所蔵黄檗鉄眼版一切経目録』（上越教育大学附属図書館、一九八八年三月）一六六頁を参照。

34 「『黄檗版大蔵経』刊記集解題」（『影印黄檗版大蔵経刊記集』思文閣出版、一九九四年三月）を参照。

35 松永知海「『黄檗版大蔵経』の刊行について——入れ版を中心として——」（『高橋弘次先生古稀記念論集浄土学仏教学論叢』第一巻、二〇〇四年十一月）は、購入者の希望や、改刻・摺印・製本・納経の過程で生じる時間のズレによって、同時期に摺印された黄檗蔵であっても、全く同じ經典が納入されているとは限らないと結論している。

36 松永氏の示教によれば、黄檗蔵に町版が入れ版される場合、版木を購入して刷る場合もあれば、蔵版者に刷らせるケースもあり、なかには覆刻して刷るケースもあったと推測されることである。また黄檗蔵の製本所は木屋町二条にあり、ここで製本する際に町版を入れたケース

もあつたそうで、これら入れ版された冊の表紙・題簽・紙質・書形などは、黄檗藏の他の覆嘉興藏本部分と同じであり、そのため黄檗藏の入れ版とわかるのである。もしかすると、覆五山版『都序』の場合も、宝蔵院で原蔵版者から版木を入手して、黄檗藏に入れ版するものとして、田原がその印造を請け負った可能性がないとはいえない。その場合、田原が無刊記本に自分の刊記を埋木して印造するようになったのは、宝蔵院で覆嘉興藏本が完成して、覆刻本の版木の所有権が完全に田原に帰して以降のこととなるう。

37 本稿注(17)所引の拙稿を参照。

38 宇井前掲書二二二頁を参照。

#### 附記

本稿は平成十七年五月二十八日に慶応義塾大学で開催された宋代文学研究談話会で行った研究発表「書籍聚散史——宋代書目の著録から和刻本の出版に至るまで——」の一部をもとに改稿したものである。コメンテーターとして貴重な御指摘を頂戴した仏教大学中原健二教授をはじめ、諸先生方に、謹んで深甚の謝意を表したい。また獅子谷法然院貫主梶田真章師には同院所蔵の黄檗版『都序』の閲覧をお許しいただき、仏教大学松永知海教授には法然院に御紹介いただいたうえ、調査に御同道いただき、黄檗藏調査の豊富な経験にもとづく貴重な御教示を頂戴した。そのほか、CBETA制作「電子仏典集成」CDロムを御恵贈下さった中華仏学研究所図書館館長・CBETA総幹事杜正民老師、及び閲覧・複写に際し御高配を賜った大谷大学図書館・国立国会図書館・駒沢大学図書館・東京大学総合図書館・同東洋文化研究所・成田山仏教図書館・松ケ岡文庫には、ここに記して厚く御礼申し上げたい。

